

拾遺和歌集の萬葉歌

辻 憲 男

梨壺の五人による天曆の古点が行われて後、萬葉集は次第に読者層を広げ、平安和歌の世界に受け入れられていった。寛弘年間、拾遺和歌集が拾遺抄から編まれた時に、人曆の歌を中心に萬葉歌が大量に増補されたのも、その一つの現われであった。

萬葉歌人	歌集	拾遺和歌集	拾遺抄	備考
柿本人麿		一〇四	一〇	
大伴坂上郎女		六	四	
山辺赤人		三	一	
大伴家持		三	一	
大伴像見		二	一	
久米広縄		一	一	
安貴王		一	一	拾遺抄に大伴田村大嬢一首

湯原王 (笠金岡)	一	一	一
大伴百世	一	一	一
石上乙麿	一	一	一
安倍広庭	一	一	一
沙彌満誓	一	一	一
よみ人しらず	一六	一〇	拾遺抄に藤原永手一首
計	一四二	三四	拾遺抄のみの歌人二首

表のごとく、拾遺抄から拾遺和歌集へと萬葉歌の数は四倍以上になり、中でも人麿の評価が格段に高く十倍以上に
なっている。また拾遺抄全体で見ると、貫之が最も多く(五四首)、人麿は躬恒・能宣・元輔・兼盛・伊勢らに続いて
九番目であったのが、拾遺和歌集では貫之(一一三首)に次いで二番目になり、その他の平安朝の歌人たちを大きく上
回っている。拾遺和歌集は流布本によれば全歌数一三五一首であるが、実にその約一割が萬葉集に淵源を持つ歌であ
ったわけである。⁽¹⁾

—

人麿歌については後に述べるとして、先にそれ以外の萬葉歌を歌人別に掲げる。⁽²⁾

(▽印は拾遺抄にも載るもの。括弧内は萬葉集の巻・番号、作者。「同」とあるのは萬葉集と拾遺和歌集とが同じ作者であること
を示す)

①大伴坂上郎女

一三〇 ▽郭公いたくななきそひとりゐていのねられぬにきけばくるしも 抄四〇三 (8四八、同)

九六六 ▽くろかみにしろかみまじりおふるまでかかるこひにはいまだあはざるに 抄三七二 (4五三、同)

九六七 ▽しほみてば入りぬるいその草なれや見らくすくなくこふらくの多き 抄三三六 (7三五、作者不明)

九六八 しかのあまのつりにともせるいさり火のほのかに人を見るよしもがな (12三七、作者不明)

九六九 いはねふみかさなる山はなけれどもあはぬ日かずをこひやわたらん (11四三、人麻呂歌集)

一三〇〇 ▽わがせこをこふるもくるしいとまあらばひろひてゆかむ恋忘貝 抄四六六 (6九四、同)

②山辺赤人

三 昨日こそ年はくれしか春霞かすがの山にはや立ちにけり (10一八四、作者不明)

八九〇 ▽わが背子をならしの岡のよぶこどり君よびかへせ夜のふけぬ時 抄三七七 (10二八三、作者不明)

八七〇 こひしくはかたみにせむとわがやどにうゑし秋はぎ今さかりなり (10三二九、作者不明。8二四一、同)

③大伴家持

二 うちきらし雪は降りつつしかすがにわが家のそのに鶯ぞなく (8二四一、同)

三 春ののにあさるきぎすのつまごひにおのがありかを人に知れつつ (8二四四、同)

一三三三 ▽久方のあめのふる日をただひとり山べにをればむもれたりけり 抄四七〇 (4五九、同)

④大伴像見

七五五 ▽いそのかみふるとも雨にさはらめやあはむといもにいひてしものを 抄三三六 (4六四、同)

一〇七〇 ▽ふるさとのならしのをかに郭公ことづてやりきいかにつげきや 抄四〇四 (8二五六、大伴田村大嬢)

⑤久米広縄

七 〇 家にきて何をかたらむあしひきの山ほととぎすひとこゑもがな 抄二 (19四三、同)

⑥ 安貴王

一四 〇 秋立ちていく日もあらねどこのねぬるあさけの風はたもとすずしも 抄五二 (8一五、同)

⑦ 湯原王

一四 〇 〇 ひこぼしの思ひますらん事よりも見る我くるしよのふけゆけば 抄五二 (8一四、同)

⑧ (笠金岡)

三五 〇 浪のうへに見えしこじまのしまがくれゆくそらもなし君に別れて 抄五二 (8四四、笠金村)

⑨ 大伴百世

六五 〇 〇 こひしなむのちはなにせんいける日のためこそ人の見まくほしけれ 抄四〇 (4五〇、同)

⑩ 石上乙磨

六二 〇 〇 あしひきの山こえくれてやどからばいもたちまちていねざらむかも 抄五五 (7三四、作者不明)

⑪ 安倍広庭

一〇六 〇 〇 いにし年ねこじてうゑしわがやどのわか木の梅は花さきにけり 抄六 (8四三、同)

⑫ 沙彌満誓

一三七 〇 〇 世の中をなににたとへむあさぼらけこぎゆく舟のあとのしら浪 抄五五 (3三三、同)

⑬ よみ人しらず

二六 〇 〇 袖たれていざわがそのにうぐひすのこづたひちらす梅の花見む 抄七 (19四七、藤原永手)

三五 〇 〇 郭公なくや五月のみじか夜もひとりしぬればあかしかねつも 抄八 (10二九、作者不明)

三五 〇 〇 おくれるてわがこひをれば白雲のたなびく山をけふやこゆるん 抄八 (9六一、(後人))

六三三 よそにのみ見てやはこひむ紅のすゑつむ花のいろにいでは
(10一九三、作者不明)

六三三 六四五 ▼あしひきの山下とよみ行く水の時ぞともなくこひ渡るかな
(11三七〇、作者不明)

六三三 七三九 ▼しかのあまのつりにともせるいさり火のほのかにいもを見るよしもがな
(12三三〇、作者不明)

七三九 七七七 ▼あしひきの山した風もさむけきにこよひも又やわがひとりねん
(1一四、或云、大行天皇)

七三九 八〇三 ▼あしひきの葛木山にゐる雲のたちてもゐても君をこそおもへ
(11四三三、人麻呂歌集)

八〇三 八三三 ▼むばたまのいもがくるかみこよひもやわがなきとこになびきいでぬらん
(11三五四、作者不明)

八三三 八三五 ▼みな月の土さへさけてる日にもわがそでひめやいもにあはずして
(10一九五、作者不明)

八三五 八六〇 ▼浪まより見ゆるこ島の浜ひさきひさしくなりぬ君にあはずて
(11二七三、作者不明)

八六〇 八七三 ▼玉河にさらす手づくりさらさら昔の人のこひしきやなぞ
(14三三三、作者不明)

八七三 八八九 ▼ちりひちのかずにもあらぬ我ゆゑに思ひわぶらんいもがかなしき
(15七七七、中臣宅守)

八八九 一一三三 ▼やほかゆくはまのまさごとわがこひといづれまされりおきつしまもり
(4五九六、笠女郎)

一一三三 一二三三 ▼はふりこがいはふ社のもみぢばもしめをばこえてちるといふものを
(10三〇九、作者不明)

一二三三 一三〇三 ▼うつくしと思ひしいもを夢に見ておきてさぐるになきぞかなしき
(12三二四、作者不明)

拾遺和歌集および拾遺抄の編者たちは、これらの「萬葉歌」をどのような資料から採収したのだろうか。現存の他の文献を見る限りでは、中にごく少数ながら口頭で伝わっていたものがあつたようにも思われる。が、三好英二『校本拾遺抄とその研究』によれば、拾遺抄の場合、人麿・赤人以外の歌人およびよみ人しらずとして載せられた歌は、大略萬葉集から直接に撰収したものであろうが、しかし拾遺和歌集の場合は、人麿歌のほとんどは、先に「柿本集の如きもの」が存在していて、それから撰収したものと考えられる、という。また奥村恒哉氏「拾遺集の萬葉歌」は拾遺集歌をすべて間接資料から採られたものとするが、一々の歌についての論証はなされず、いまだ例証にとどまって

いる。本稿はなおこの点を検討し、あわせて拾遺集時代における萬葉歌訓読の具体相を探ってみたいと思う。

まず、拾遺和歌集と拾遺抄と同じ一首のみで、その間にほとんど異なる⑤⑥⑦⑨⑩⑪⑫の七人を取り上げる。拾遺抄編纂以前に萬葉集以外の文献が介在した可能性も十分あるが、それとても萬葉集歌をいかようにか訓読して得られたものではあろう。拾遺和歌集―拾遺抄―萬葉集の間で歌詞の相違する箇所を、

⑤ 久米広縄 家に来て―家に来て―家尔去而 ひとこゑもがな―ひと声もがな―一音毛奈家

⑥ 安貴王 いく日もあらねど―いくかもあらねど―幾日毛不有者 たもとすずしも (書陵部蔵堀河具世筆本・

北野天満宮本、たもとさむしも)―たもとすずしも―手本寒母

⑦ 湯原王 思ひますらん―おもひやすらん―念座良武 事よりも―事よりも―従情

⑨ 大伴百世 ためこそ人の―ためこそ人を―為社妹乎 見まくほしけれ―見まくほしけれ―欲見為礼

⑩ 石上乙麿 山こえくれて―山こえくれて―山行暮 いねざらむかも―いねざらんかも―宿将借鴨

⑪ 安倍広庭 いにし年―いにし年―去年春 ねこじてうゑし―ねこじてうゑし―伊許自而殖之

⑫ 沙彌満誓 あさぼらけ―あさぼらけ―旦開 こぎゆく舟の―こぎゆくふねの―榜去師船之 あともしら浪

―あとのしらなみ―跡無如

のように対比してみると、それが単なる誤読ではなく意識的な変改であったらしいことが窺える。拾遺集の詞書は、

⑤「夏山をこゆとて」が拾遺抄の「夏山をまかり侍るとて」から、⑩「たびの思ひをのぶといふことを」が「たびにおもひをのふといふ心をよみ侍りける」からそれぞれ取ったものであろう。萬葉集の題詞は、⑤「恨_ニ霍公鳥不_レ喧歌一首」、⑩「羈旅作」である。また作者名は、⑩石上乙麿の拾遺集七八一(萬葉集の作者不明歌。なぜ乙麿作とされたかは未詳)以外は、萬葉集と一致する。そのうち⑨「太宰監大伴百世」(拾遺抄)と⑪「中納言安倍広庭」(拾遺集・拾遺抄)の官名併記は、明らかに萬葉集の題詞を受け継いだものであろう。次に拾遺集の、

⑧ (笠金岡) 浪のうへに見えしこじまのしまがくれゆくそらもなし君に別れて

は、萬葉集の題詞に「天平五年癸酉春閏三月、笠朝臣金村贈入唐使二歌一首并短歌」(8一四五三〜一四五五)とある、その第一反歌「波上従所見児島之雲隱穴氣衝之相別去者」にもとにしている。異本系拾遺和歌集(堀河具世筆本、天理図書館乙本、多久図書館本、北野天満宮本——以下略称を用いる)では第二句が「見ゆる」、第三句が「雲かくれ」となっていて、原歌により忠実である。拾遺抄にはない。拾遺集の詞書に「かさのかなをかがもろこしにわたりて侍りける時、めのながうたよみて侍りける返し」とあるのは、萬葉集の長歌、

玉だすき かけぬ時なく 息の緒に 我が思ふ君は うつせみの 世の人なれば 大君の 命かしこみ 夕されば 鶴が
妻呼ぶ 難波潟 三津の崎より 大舟に ま梶しじ貫き 白波の 高き荒海を 島伝ひ い別れ行かば 留まれる 我は幣
引き 齋ひつつ 君をば遣らむ はや帰りませ (一四三)

が某入唐使の妻の立場での代作であるのを、笠金村||入唐使としてその妻が詠んだと誤解した故であろう。そのため「反歌」を「返し」と誤り、名も絵師巨勢金岡と混同したらしく(北野本は「かなむら」、第三句以下はほとんど改作に近くなっている。

④ 大伴像見

七五 さはらめやーさはらめやー将関哉 あはむといもにーあはんといもにー妹似相武登

一〇七 ならしのをかに(堀河本・天理図書館甲本、ならしのおかの)ーならしのをかのー奈良思乃岳能 事づてや
りきーことづてやりきー言告遣之

の場合も、萬葉集の原歌をむしろ意識的に変形したものと思われる。ただし、後者は萬葉集の題詞に「大伴田村大嬢与三妹坂上大嬢二歌一首」とあり、拾遺抄でも「坂上郎女につかはしける 大伴のたむらの御女」としたが、拾遺集ではこの詞書を踏襲しながら、作者は像見に変えてしまった(堀河本・天理甲本・北野本では「大伴田邑方見」。中間的な形

態であろう。憶測すれば、女性どうしであることを避けたのでもあろうか。次に、

①大伴坂上郎女の六首中、(拾遺集—萬葉集)

九六 つりにともせる—釣為燭有　ほのかに人を—髣髴妹乎　見るよしもがな—将見因毛欲得

九七 なけれども—雖不有　あはぬ日かずを—不相日数　こひやわたらん—恋度鴨

九八 わがせこを—吾背子尔　こふるもくるし—恋者苦

は、正しい訓読ではないが、原歌の意をほぼ取っている。九六八は少異歌が七五二(よみ人しらず)にある。それは第四句を「ほのかに妹を」とする拾遺抄のよみ人しらず歌を継承したもので、九六八はそれを別の女歌にして「妹」を「人」に変えて採収した。なぜ坂上郎女作とされたかは不明であるが、九六六、九六九を四首一群の恋歌として構成するためであろうか。九六九も同様である。一二四五は詞書に「物へまかりけるみちに、はまづらにかひの侍りけるを見て」とあり(拾遺抄もほとんど同文)、萬葉集の題詞「同坂上郎女向_レ京海路見_二浜貝_一作歌一首」に拠ったことが明らかである。

③大伴家持の三首は、詞書に、

二　うぐひすをよみ侍りける

三　題しらず

三三　紀郎女におくり侍りける(拾遺抄も同文)

とある。萬葉集の題詞は、それぞれ「大伴宿祢家持鶯歌一首」「大伴宿祢家持春雉歌一首」「大伴宿祢家持報_二贈紀女郎_一歌一首」である。一一はすでに後撰和歌集よみ人しらずに、初句「かきくらし」の形で載る。結句「鶯ぞなく」は萬葉集の「鶯鳴裳」と異なり、後撰集、古今六帖と同じである。さて、

②山辺赤人

の三首は、いずれも人麿集Ⅱ〔私家集大成 中古Ⅰ〕、古今六帖に載る。異同を対比すれば、

拾遺和歌集	人麿集Ⅱ	古今六帖	萬葉集
三 かすみをよみ侍りける 年はくれしか	春 としはくれしか	ついたちの日 年はくれしか	詠霞 年者極之賀
八一九 ならしの岡の 夜のふけぬ時	春 ならしの岡の 夜のふけぬとき	人をととむ ならしの山の 夜のふけぬとき	詠鳥 莫越山能 夜之不深刀尔
八三七 こひしくは かたみにせむと わがやどに うゑし秋はぎ (堀河本・ 天理甲本、うへし藤浪) 今さかりなり (堀河本・ 天理甲本、花さきにけり)	秋 恋しくは かたみにせよと わかせこか うへし秋はぎ はなさきにけり	ふち ⁽³⁾ 恋しくは かたみにもせん (かたみにも せむと) わかせこか (わかやとに) うゑし藤浪 花さきにけり (今咲きにけり)	詠花 (10三二九) 山部宿祢赤人歌一首 (8二四二) ⁽⁴⁾ 恋之久者 恋之家婆 形見尔為与登 形見尔將為跡 吾背子我 吾屋戸尔 殖之秋芽子 殖之藤浪 花咲尔家里 今開尔家里

歌詞は、三、八一九が人麿集Ⅱと一致する（右の他、赤人集Ⅰ・Ⅱにも載る）。八一九は、拾遺抄に「ならしの山の」。「よのふけぬまに」とあったのを「岡」・「時」に改め（ただし堀河本・天理甲本は「山」）、かえって萬葉集の原歌から離れた。また八三七は萬葉集の二首を合成したような歌であるが、結句の「今さかりなり」は故意の改変であるらしく、他書に見えない。このような一種の改作は、拾遺和歌集全体の姿勢でもあるのだろう。

⑬よみ人しらずの十六首のうち、

三 　▽袖たれていざわがそのにうぐひすのこづたひちらす梅の花見む

は、拾遺抄に「大和守藤原長平（永平朝臣）」とあったのをなぜか無視した（北野本のみ「大和守藤原永平」とある）。拾遺抄が萬葉集の「大和国守藤原永手朝臣」に拠ったことは明らかであるが（作歌はこの一首のみ）、結句の「見む」（萬葉集「見尔」）も「見む」に改めてしまっている。その他、原歌との相違が著しいのは、（拾遺集—萬葉集）

一三五 　▽なくや五月の—なくや五月の—来鳴五月之

六三三 　見てやはこひむ（堀河本・天理甲本・北野本、見つゝやこひん）—見筒恋牟　いろにいでずは（堀河本・天

理甲本、いろにいてすとも）—色不出友

六五五 　▽時ぞともなく—時ぞともなく—時友無雲　こひ渡るかな—こひやわたらん—恋度鴨

七七七 　あしひきの—見吉野乃　さむけきに—寒久尔　こよひも又や—為当也今夜毛

七九九 　あしひきの—春楊　ある雲の—発雲　君をこそおもへ—妹念

八〇三 　▽こよひもや—こよひもか—今夜毛加　わがなきとこに—我がなきゆかに—吾無床尔　なびきいでぬ

らん—なびきいでぬらん—靡而宿良武

八六〇 　昔の人の—奈仁曾許能兒乃　こひしきやなぞ—已許太可奈之伎

八八九 　▽はまのまさごと—はまのまさごと—浜之沙毛　わがこひと—我がこひと—吾恋二　いづれまさされり

—いづれまされり—豈不益歟

一三五 はふりこが—祝部等之 しめをばこえて—標繩越而

一三三 ▽思ひしいもを—おもひしいもを—念吾妹乎 なきぞかなしき(堀河本・天理甲本、なきかかなしき) —な

きがかなしき—無之不怜

である。拾遺抄をそのまま踏襲したものは一二五、八八九である。

二

人麿歌一〇四首のうち、萬葉集の歌でないのは次の十七首である。⁽⁵⁾

三 梅の花それとも見え久方のあまぎる雪のなべてふれれば

一六 あすからはわかなつまむとかたをか朝の原はけふぞやくめる

二九 竜田河もみぢばながる神なびのみむろの山に時雨ふるらし

三九 浦ちかくふりくる雪はしらなみの末の松山こすかとぞ見る

四七 白浪はたてど衣にかさならずあかしもすまもおのがうらうら

四三 さざなみやあふみの宮は名のみして霞たなびき宮きもりなし

五七 千早振神もおもひのあればこそ年へてふじの山ももゆらめ

六〇 無き名のみたつの市とはさわげどもいさまだ人をうるよしもなし

七三 竹の葉におきゐる露のまろびあひてぬるとはなしに立つわがなかな

七五 年をへて思ひ思ひてあひぬれば月日のみこそうれしかりけれ

七九 ▽ことならばやみにぞあらし秋の夜のなぞ月かげの人だのめなる

八〇六 ▽夢をだにいかでかたみに見てしかなあはでぬるよのなぐさめにせん 抄三三

八〇四 ▽たのめつつこぬ夜あまたになりぬればまたじと思ふぞまつにまされる 抄三四

八〇三 あらちをのかるやのさきに立つしかもいと我ばかり物はおもはじ

八〇二 ▽わがごとや雲の中にも思ふらむ雨もなみだもふりにこそふれ 抄三五

二一九 夜をさむみ衣かりがねなくなへにはぎの下葉は色つきにけり

一三六 ▽わぎもこがねくたれがみをさるさはの池のたまもと見るぞかなしき 抄五五

これらを除いた八十七首の萬葉歌は、萬葉集の側から次のように分類することができる。

人麻呂関係歌 …………… ① (十四首)

人麻呂歌集歌 …………… ② (二十七首)

非人麻呂歌 …………… ③ (四十六首)

以下①②③の順に述べる。

①人麻呂作歌 (※の依羅娘子は便宜上ここに入れた)

四九三 おふの海にふなのりすらんわぎもこがあかものすそにしほみつらんか (一四〇。15三二、遣新羅使人)

四九六 あすかがはしがらみわたしせかませばなぐる水ものどけからまし (二二七)

五九九 ちはやぶるわがおほきみのきこしめすあめのしたなる草の葉もうるひにたりと山河のすめるか

うちとみこころをよしののくにの花ざかり秋つこのべに宮ばしらふとしきましてももしきの大

宮人は舟ならべあき河わたりふなくらべゆふかはわたりこの河のたゆる事なくこの山のいやた

かからしたま水のたぎつの宮こ見れどあかぬかも (一三三)

見れどあかぬよしのの河の流れてもたゆる時なく行きかへり見む (一三七)

六六八 みくまのの浦のはまゆふももへなる心はおもへどただにあはぬかも (4四九六)

※七五 思ふなと君はいへどもあふ事をいつとしりてかわがこひざらん (2二〇、依羅娘子)

一一三 わぎもこがあかもぬらしてうゑし田をかりてをさめむくらなしのはま (9七〇、或云、作歌)

一一〇 をとめごが袖ふる山のみづがきのひさしきよより思ひそめてき (4五二、11四三、人麻呂歌集)

一一九 いはみなるたかまの山のこのまよりわがふるそでをいも見けんかも (2二四、2三三)

一一七 こぞ見てし秋の月夜はてらせどもあひ見しいもはいやとほざかり (2三二)

一一五 さざなみのしがのてこらがまかりにし河せの道を見ればかなしも (2三六)

一一六 おきつ浪よるあらいそをしきたへの枕とまきてなれる君かも (2三三)

一一九 家にいきてわがやを見ればたまざさのほかにおきけるいもがこまくら (2三六)

一一三 いも山のいはねにおける我をかもしらずていもがまちつつあらん (2三三)

これら十四首は拾遺抄には見えない。各々の詞書および歌詞を人麿集・萬葉集と比較してみよう。

拾遺和歌集	人麿集 I	萬葉集
<p>四九三 伊勢のみゆきにまかりとまりて おふの海に わぎもこが あかもすすそに (堀河本・北野本、玉も のすすそに)</p>	<p>いせのくににみゆきする時に、 京にとめられてよめる みをのうらに つまとともに たまものすすそに</p>	<p>幸_二于伊勢国_一時留_レ京柿本朝 臣人麻呂作歌 嗚呼見乃浦尔 憾婦等之 珠裳乃須十二</p>

四九六	<p>あすかの女王ををさむる時よめる のどけからまし</p>	<p>あさかのをんなを、かりにを さむるときによめる のとけからまし</p>	<p>明日香皇女木跡躰宮之時柿本 朝臣人麻呂作歌一首并短歌 能杼尔賀有萬思</p>
五九九	<p>よしのの宮にたてまつるうた ちはやぶる あめのしたなる 草の葉も（堀河本・多久本・北野本、くさはしも） うるひにたりと（堀河本・天理乙本・多久本、うるひにたれと） 花ざかり ふとしきまして 舟ならべ ふなくらべ いやたかからし たま水の たぎつの宮こ</p>		<p>幸三于吉野宮之時柿本朝臣人 麻呂作歌 八隅知之 天下尔 国者思毛 澤二雖有 花散相 太敷座波 船並亘 舟競 弥高思良（良思）⁽⁶⁾ 珠水 激瀧之宮子波</p>

五七〇	反歌（堀河本・多久本、御返）（天理乙本、御かへし）（北野本、御返事） よしのの河の 流れても たゆる時なく 行きかへり見む	よしのやまにみゆるする時の <small>(マヤ)</small> 吉野の山の とこなめの たゆる時なく ゆきかへりみん	反歌 吉野乃河之 常滑乃 絶事無久 復還見牟
六六八	題しらず ももへなる 心はおもへど	（詞書ナシ） ももへなる 心はおもへ	柿本朝臣人麻呂歌四首 百重成 心者雖念
七五六※	題しらず あふ事を いつとしりてか	時 よさみの王のあひわかれける 逢ことを いつかとしりてか	柿本朝臣人麻呂妻依羅娘子 与三人麻呂相別歌一首 相時 何時跡知而加
一一二二三	題しらず わぎもこが	（詞書ナシ） わかせこが	（題詞ナシ） 右二首或云柿本朝臣人麻呂作 吾妹児之

	<p>あかもぬらして かりてをさめむ くらなしのはま</p>	<p>あかもぬらして かりてをとめん くらなしの山<small>花イ</small></p>	<p>赤裳渥塗而 苜將蔵 倉無之濱</p>
<p>一一一〇</p>	<p>題しらず をとめごが ひさしきよより 思ひそめてき</p>	<p>〔人麿集Ⅲ〕寄物陳思 おとめこの ひさしきよより おもひきわれ<small>なご</small></p>	<p>(寄物陳思) 柿本朝臣人麻呂歌三首 未通女等之 久時従 憶寸吾者</p>
<p>一一三九</p>	<p>いはみに侍りける女のまうできたりけるに たかまの山の このまより わがふるそでを</p>	<p>いはみのくにありけるをんなのきたりたりけるに たかまの山の 木の間より わかふる袖を</p>	<p>柿本朝臣人麻呂従三石見国一 別妻上来時歌二首并短歌 高角山乃 木間従文 吾袂振乎</p>
<p>一二八七</p>	<p>妻にまかりおくれて又のとしの秋、月 を見侍りて いやとほざかり</p>	<p>めしにてのちによめる……ま たゆふ いやとをさかる</p>	<p>柿本朝臣人麻呂妻死之後泣血 哀慟作歌二首并短歌 弥年放</p>

一三五	<p>きびつ<small>の</small>うね<small>へ</small>なく<small>なり</small>て<small>の</small>ち<small>よ</small>み<small>侍</small> り<small>ける</small> しが<small>の</small>て<small>こ</small>ら<small>が</small> ま<small>か</small>り<small>に</small>し 河<small>せ</small>の<small>道</small>を<small>（</small>堀<small>河</small>本<small>・</small>北<small>野</small>本<small>、</small>河<small>せ</small>を<small>み</small>れ は<small>）</small> 見<small>れ</small>ば<small>か</small>な<small>し</small>も<small>（</small>堀<small>河</small>本<small>、</small>あ<small>は</small>れ<small>な</small>ら<small>ん</small> も<small>）</small>（天<small>理</small>甲<small>本</small>、あ<small>は</small>れ<small>な</small>ら<small>ん</small>か<small>）</small>（北<small>野</small> 本<small>、</small>あ<small>は</small>れ<small>な</small>る<small>か</small>な<small>）</small></p>	<p>ひ<small>き</small>て<small>の</small>う<small>ね</small>へ<small>身</small>な<small>け</small>る<small>時</small> よ<small>める</small> しか<small>の</small>つ<small>の</small>ゝ<small>か</small> ま<small>か</small>り<small>に</small>し 河<small>せ</small>を<small>み</small>れ<small>は</small> あ<small>は</small>れ<small>な</small>る<small>か</small>な</p>	<p>吉備津采女死時柿本朝臣人麻呂 作歌一首并短歌 志我津子等何 志我乃津之子我 罷道之 川瀬道 見者不怜毛</p>
一三二六	<p>さ<small>ぬ</small>き<small>の</small>さ<small>み</small>ね<small>の</small>し<small>ま</small>に<small>し</small>て<small>い</small>は<small>や</small>の 中<small>に</small>て<small>な</small>く<small>な</small>り<small>た</small>る<small>人</small>を<small>見</small>て お<small>き</small>つ<small>浪</small> よ<small>る</small>あ<small>ら</small>い<small>そ</small>を 枕<small>と</small>ま<small>き</small>て な<small>れ</small>る<small>君</small>か<small>も</small></p>	<p>さ<small>ぬ</small>き<small>の</small>さ<small>ね</small>み<small>の</small>う<small>ら</small>に<small>し</small>て、 い<small>は</small>の<small>う</small>へ<small>に</small>な<small>く</small>な<small>れ</small>る<small>人</small>を み<small>て</small> お<small>ほ</small>つ<small>あ</small>ら<small>み</small> よ<small>る</small>あ<small>ら</small>磯<small>を</small> 枕<small>と</small>な<small>き</small>て な<small>る</small>き<small>み</small>か<small>も</small></p>	<p>讚岐狭岑嶋視三石中死人一柿本 朝臣人麻呂作歌并短歌 奥波 来依荒磯乎 枕等卷而 奈世流君香聞</p>
一三一九	<p>め<small>の</small>し<small>に</small>侍<small>り</small>て<small>の</small>ち<small>か</small>な<small>し</small>び<small>て</small>よ<small>める</small></p>	<p>め<small>し</small>に<small>て</small>の<small>ち</small>に<small>よ</small>める<small>……</small>ま</p>	<p>柿本朝臣人麻呂妻死之後泣血</p>

	<p>家にいき たまざさの ほかにおきける</p>	<p>たゆふ 家にきて 玉さゝの 外に置ける</p>	<p>哀慟作歌二首并短歌 家来而 玉床之 外向来</p>
<p>一三二二</p>	<p>いはみに侍りてなくなり侍りぬべき時 にのぞみて いも山の いはねにおける 我をかも しらずていもが</p>	<p>いはみのくにありてなくな りにぬへきとき<small>（つぎ）</small>にのぞみてよ める いもやまの いはにき<small>（つぎ）</small>における われにかも しらすて妹か</p>	<p>柿本朝臣人麻呂在石見国 臨死時自傷作歌一首 鴨山之 磐根之卷有 吾乎鴨 不知等妹之</p>

三好氏によれば、この中で「明らかに萬葉より直接に撰収したと見られるもの」は五六九と一三二六の二首であるという。しかし、一三二六は必ずしもそうとは言えない。五六九も確かに萬葉集以外の文献には見えないが、歌詞の相違が甚だしく、直接萬葉集の原歌に就いて訓読したままのものとは考え難い。このような変形は、誤写、誤読、誤伝、合理解、節略、改竄、改作など、伝写・伝誦過程に生じた様々な要因が重なって生じたものであろう。

右について気づいたことを二つ補足しておく。その一つは拾遺和歌集と人麿集とで歌詞の一致するものが意外に多いことである。反対に相違の目立つのは四九三、五七〇、一三二五ぐらいであるが、一三二五などは人麿集よりも萬

葉集の原歌に近くなっている。四九三の「あかものすそに」は萬葉集の卷十五の伝誦歌による。五七〇の「流れても」は拾遺集独自の異伝で、改作と見なすべきものであるうか。また詞書は、四九三、四九六、一二八七、一三一五、一三一六、一三一九、一三二一などは、萬葉集の題詞をほぼ正確に読み取っているが、一二三九は「上来」の主語を妻と取り違えている。その二は地名であるが、拾遺集の「おふの海」「たかまの山」「いも山」は原歌の一般的でない小地名を歌枕的名所に置き換えたものと思われる。「おふの海」と「いも山」は、古今和歌集に「をふの浦」(一〇九九「伊勢歌」)、「いもせの山」(八二八)があるのにひかれたのであろう。

三

②人麻呂歌集歌

- 一 盃 天の河こぞの渡りのうつろへばあさせふむまに夜ぞふけにける (10三〇八)
- 二 三三 ▽あしひきの山ぢもしらずしらがしの枝にもはにも雪のふれば (10三三五)
- 四 四五 ちちわくに人はいふともおりてきむわがはた物にしろきあさぎぬ (7三九八)
- 四 六八 そらの海に雲の浪たち月の舟屋の林にこぎかくる見ゆ (7四〇六八)
- 四 六九 河のせのうづまく見れば玉もかるちりみだれたるかはの舟かも (9二六五)
- 四 九〇 なる神のおとにのみきくまきもくのひばらの山をけふ見つるかな (7二〇九二)
- 四 九一 いにしへに有りけむ人もわがごとやみわのひばらにかざし折りけん (7二二八)
- 五 七 かのをかに草かるをのこしかなかりそありつつもきみがきまさむみまくさにせん (7二九二)
- 五 九六 ちはやぶる神のたもてるいのちをばたれがためにか長くと思はん (11二四二六)
- 六 九 おほなむちすくなみ神のつくれりし妹背の山を見るぞうれしき (7三四七)

- 八〇 　　みなそこにおふるたまものうちなびき心をよせてこふるこのころ
 七九 　　むばたまのこよひなあけそあけゆかばあさゆく君をまつくるしきに
 七八 　　みか月のさやかに見えぬ雲隠見まくぞほしきうたてこのころ
 七六 　　久方のあまてる月もかくれ行く何によそへてきみをしのばむ
 七五 　　まさしてふやそのちまたにゆふけとふうらまさなせよいもにあふべく
 七四 　　なる神のしばしうごきてそらくもり雨もふらなん君とまるべく
 七三 　　わがせこをわがこひをればわがやどの草さへ思ひうらがれにけり
 七二 　　ますかがみ手にとりもちてあさなあさな見れどもきみにあく時ぞなき
 七一 　　▽かくばかりこひしき物としらませばよそに見るべくありけるものを
 七〇 　　▽よそに有りてくもるに見ゆるいもが家に早くいたらむあゆめくるこま
 六九 　　恋するにしにする物にあらませばちたびぞ我はしにかへらまし
 六八 　　こひてしねこひてしねとやわぎもこがわが家の門をすぎてゆくらん
 六七 　　こひしなばこひもしねとや玉梓の道ゆき人に事づてもなき
 六六 　　荒磯の外ゆく浪の外心我はおもはじこひはしぬとも
 六五 　　山しなのこはたの里に馬はあれどかちよりぞくる君を思へば
 六四 　　春日山雲井かくれてとほけれど家はおもはず君をこそおもへ
 六三 　　まきもくの山べひびきてゆく水のみなわのごとによをばわが見る
- 抄三二
抄三一
抄三〇
抄二九
抄二八
抄二七
抄二六
抄二五
抄二四
抄二三
抄二二
抄二一
抄二〇
抄一九
抄一八
抄一七
抄一六
抄一五
抄一四
抄一三
抄一二
抄一一
抄一〇
抄九
抄八
抄七
抄六
抄五
抄四
抄三
抄二
抄一
- (11四六)
(11三六)
(11四四)
(11四三)
(11四二)
(11四一)
(11四〇)
(11三九)
(11三八)
(11三七)
(11三六)
(11三五)
(11三四)
(11三三)
(11三二)
(11三一)
(11三〇)
(11二九)
(11二八)
(11二七)
(11二六)
(11二五)
(11二四)
(11二三)
(11二二)
(11二一)
(11二〇)
(11一九)
(11一八)
(11一七)
(11一六)
(11一五)
(11一四)
(11一三)
(11一二)
(11一一)
(11一〇)
(11〇九)
(11〇八)
(11〇七)
(11〇六)
(11〇五)
(11〇四)
(11〇三)
(11〇二)
(11〇一)
(11〇〇)

右の二十七首である。

①と同様に人麿集・萬葉集との異同を示す。

拾遺和歌集	人麿集 I	萬葉集
一四五 題しらず こそこの渡の あさせふむまに	(詞書ナシ) こそこのわたりの 河せふむまに	七夕 去歳渡代 河瀬於踏
二五二 題しらず 枝にもはにも (堀河本・天理甲本・天理 乙本・多久本、枝もとをゝに)	(詞書ナシ) 枝もとをゝに	冬雑歌 枝母等乎々尔
四七五 題しらず (堀河本・多久本、寄衣) ちちわくに おりてきむ わがはた物に	(詞書ナシ) ちちに おりつかん わかはたものゝ	寄衣 千名 織次 我廿物
四八八 詠天 そらの海に こきかくる見ゆ (堀河本、こきかへされぬ) (多久本、こきかくされぬ)	(詞書ナシ) あまのうみに こきかくされぬ	詠天 天海丹 榜隠所見
四八九 もをよめる	(詞書ナシ)	泉河辺間人宿祢作歌二首

	<p>河のせの うづまく見れば 玉もかる（堀河本、玉もかも） 川の舟かも</p>	<p>河のせに うつまくみれば 玉藻かも かはの船かも</p>	<p>河瀬 激乎見者 玉藻鴨 川常鴨</p>
四九〇	<p>山をよめる（堀河本・天理乙本・多久本・北野本、詠山） ひばらの山を けふ見つるかな</p>	<p>（詞書ナシ） 檜原の山に けふみつるかな</p>	<p>詠山 檜原山乎 今日見鶴鴨</p>
四九一	<p>詠葉 わがごとや</p>	<p>（詞書ナシ） わかことや</p>	<p>詠葉 如吾等架</p>
五六七	<p>旋頭歌 かのをかに 草かるをのこ しかなかりそ</p>	<p>〔人麿集Ⅲ〕旋頭歌 かのをかに 草かるわらは しかなかりそ</p>	<p>旋頭歌 此岡 草苺小子 勿然苺</p>
五九六	<p>題しらず 神のたもてる</p>	<p>（詞書ナシ） 神のたもてる</p>	<p>寄物陳思 神持在</p>

	<p>いのちをば たれがためにか 長くと思はん</p>	<p>命をも たかためとおもふ われならなくに</p>	<p>命 誰為 長欲為</p>
六一九	<p>たびにてよみ侍りける すくなみ神の つくれりし 見るぞうれしき</p>	<p>(詞書ナシ) す。なひ神の つくれりし みるぞうれしき</p>	<p>羈旅作 少御神 作 見吉</p>
六四〇	<p>題しらず 心をよせて</p>	<p>(詞書ナシ) こゝろをよせて</p>	<p>寄物陳思 心依</p>
七一七	<p>題しらず こよひなあけそ あけゆかば まつくるしきに</p>	<p>(詞書ナシ) こよひなあけそ 秋ゆかは 待くるしきに</p>	<p>正述ニ心緒一 是夜莫明 朱引 待苦</p>
七八三	<p>題しらず さやかに見えす</p>	<p>(詞書ナシ) さやけくもあらず</p>	<p>寄物陳思 清不見</p>
七八九	<p>題しらず</p>	<p>〔人麿集Ⅲ〕 詠月</p>	<p>寄物陳思</p>

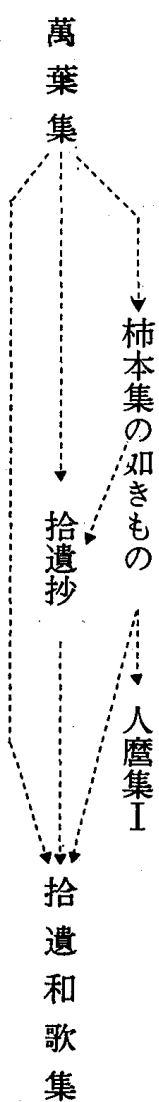
	<p>あまてる月も かくれ行く 何によそへて きみをしのばむ (堀河本・天理甲本・北野本、いもをしのはむ)</p>	<p>あまてる月の かくれなは なによそへて いもをしのはん</p>	<p>天光月 隠去 何名副 妹偲</p>
<p>八〇六</p>	<p>題しらず まさしてふ うらまさにせよ いもにあふべく (堀河本・天理甲本、いもに逢よし)</p>	<p>(詞書ナシ) まさしてふ うらまさにせよ^{いへ} 妹かあふよし</p>	<p>寄レ物陳レ思 事靈 占正謂 妹相依</p>
<p>八二六</p>	<p>題しらず しばしうごきて そらくもり (堀河本・天理甲本、さしくもり) 雨もふらなん 君とまるべく</p>	<p>(詞書ナシ) しはし空にて さしくもり 雨もふらなん 君とまるへく</p>	<p>問答 小動 刺雲 雨零耶 君將留</p>
<p>八四五</p>	<p>題しらず (堀河本・天理甲本、寄物述思) わがせこそ</p>	<p>(詞書ナシ) 我せこそ</p>	<p>寄レ物陳レ思 我背兒尔</p>

	うらがれにけり	うこかれにけり	浦乾来
八五七	題しらず ますかがみ 見れどもきみに あく時ぞなき	(詞書ナシ) ますかゝみ みれとも君に あく時ぞなき	寄レ物陳レ思 真鏡 雖見君 飽事無
八七四	題しらず こひしき物と よそに見るべく	(詞書ナシ) こひしき我と よそにもみへく	正述ニ心緒一 恋物 遠可見
九一〇	みちをまかりてよみ侍りける よそに有りて	(詞書ナシ) よそにして	行路 遠有而
九三五	題しらず ちたびぞ我は	(詞書ナシ) 我身そちたひ	正述ニ心緒一 我身千遍(千遍曾吾者) ^(?)
九三六	題しらず こひてしね こひてしねとや	(詞書ナシ) 恋くゝて こひてしねとや	正述ニ心緒一 恋死 恋死哉

	<p>すぎてゆくらん</p>	<p>行て過ぬる</p>	<p>過行</p>
<p>九三七</p>	<p>題しらず 道ゆき人に 事づてもなき</p>	<p>(詞書ナシ) 道行人に ことつてもなき</p>	<p>正述心緒 路行人 事告無</p>
<p>九五五</p>	<p>題しらず 荒磯の こひはしぬとも</p>	<p>(詞書ナシ) あら磯の こひはしぬとも</p>	<p>寄物陳思 荒磯越 恋而死軀</p>
<p>一二四三</p>	<p>題しらず こはたの里に かちよりぞくる 君を思へば</p>	<p>(人麿集Ⅲ) (詞書ナシ) こわたのさとに あゆみてわれら 君をおもひかね</p>	<p>寄物陳思 強田山 歩吾来 汝念不得</p>
<p>一二四四</p>	<p>題しらず 雲井かくれて とほけれど 君をこそおもへ</p>	<p>(人麿集Ⅲ) (正述心緒) 雲井<small>はるか</small>かくれて とをけれど 君をしそ思ふ</p>	<p>寄物陳思 雲座隱 雖遠 公念</p>
<p>一三二〇</p>	<p>めのしに侍りてのちかなしびてよめる</p>	<p>(詞書ナシ)</p>	<p>就所発思</p>

	<p>(堀河本・天理甲本、所発念)</p> <p>まきもくの 山へひびきて みなわのごとに よをばわが見る</p>	<p>まきもくの 山へひびきて 身のあはことに よをはわか身は</p>	<p>卷向之 山辺響而 三名沫如 世人吾等者</p>
--	---	---	--

全体として、拾遺和歌集は人麿集Iと比較的近い関係にあるように見える。両集の共通の原資料として「柿本集の如きもの」(三好氏)があったとすれば、萬葉集から拾遺和歌集へは、



の三つの道筋が想定されよう(この他の書が介在した可能性も十分にある)。中で拾遺抄に載せる三首は、

- (1)抄一五〇(『集二五二) 歌詞同シ。書陵部本「此歌柿下人丸集に有。或本には三方沙弥がともはべり」、貞和本「曾佐のをのみことの出雲国にいたるときにの哥にいはいく 人麿」。
- (2)抄二六一(『集八七四) 書陵部本は第四・五句「よそにぞ人をみるべかりける」。題不知、人丸。
- (3)抄三〇一(『集九一〇) 歌詞同シ。書陵部本「みちをまかり侍りてよみはべりける」。作者は流布本・書陵部本「おとまろ」、貞和本「人丸」。

である。(2)の拾遺抄書陵部本の異伝は萬葉集歌の訓からは離れ、拾遺和歌集や人麿集Iの歌詞とも違っている。が、それ以外は、(1)の詞書は萬葉集歌の左注「右柿本朝臣人麻呂之歌集出也 但件一首或本云三方沙弥作」により、(3)は

題詞「行路」を訳したものと認められる。拾遺和歌集では、拾遺抄の(1)「枝にもはにも」や(3)「よそに有りて」、(3)の詞書がそのまま生かされ、三首とも人麿作とされた。

さて右の表で注目されるのは、拾遺集の詞書、「詠天」(四八八)、「山をよめる」(四九〇)、「詠葉」(四九一)、「たびにてよみ侍りける」(六一九)である。これらは萬葉集の原本から受け継いだものである。四八九、一三三〇の詞書も、それに倣って歌の内容からつけられたのであろう。

歌詞について、拾遺集が人麿集Iと全部またはほとんど一致するのは、

四九〇、四九一、六一九、六四〇、七一七、八〇六、八五七、九三七、九五五

である。また部分的に萬葉集歌の訓読に近づいた箇所は、

「榜隠所見」↓「こぎかくる見ゆ」(四八八)、「誰為」↓「たれがためにか」(五九六)、「清不見」↓「さやか
に見えず」(七八三)、「小動」↓「しばしうごきて」(八二六)、「恋物」↓「こひしき物と」(八七四)、「過行」
↓「すぎてゆくらん」(九三六)、「歩吾来」↓「かちよりぞくる」(一二四三)、「三名沫如」↓「みなわのごと
に」(一三三〇)

反対に萬葉集歌を改変したと思われる箇所は、

「河瀬」↓「浅瀬」(二四五)、「織次」↓「織りて着む」(四七五)、「妹」↓「君」(七八九)、「刺雲」↓「空く
もり」(八二六)

などである。これはおそらく拾遺和歌集に採択される時に吟味を加えられた結果であろう。

四

③非人麻呂歌

八 たごの浦のそこさへにほふ藤浪をかざしてゆかん見ぬ人のため

(19四〇〇)

一四 あまの河とほき渡にあらねども君がふなでは年にこそまで

(10二〇五)

一四 年に有りてひとよいもにあふひこぼしも我にまさりて思ふらんやぞ

抄五

(15三六七)

三五 あまとぶやかりのつかひにいつしかもならのみやこにことづてやらん

(15三六七)

四四 月草に衣はすらんあさつゆにぬれてのちはうつろひぬとも

(7二五二)

四七 久方のあめにはきぬをあやしくもわが衣手のひる時もなき

(7二七二)

四八 ゆふされば衣手さむしわぎもこがときあらひ衣行きてはやきむ

(15三六六)

五四 山高みゆふ日かくれぬあさぢ原後見むためにしめゆはましを

(7二四二)

五六 ますかがみみしかと思ふいもにあはむかも玉の緒のたえたるこひのしげきこのごろ

(11三六六)

六六 あまぐものやへ雲がくれなる神のおとにのみやはきき渡るべき

(11三六八)

六一 おく山のいはかきぬまのみごりにこひや渡らんあふよしをなみ

(11三七七)

六九 小ひつつもけふはくらしつ霞立つあすのはる日をいかでくらさん

抄四

(10一九四)

六九 恋ひつつもけふは有りなんたまくしげあけんあしたをいかでくらさむ

(12二八四)

七四 小あひ見てはいくひささにもあらねども年月のごとおもほゆるかな

抄三

(11二五八)

七四 すぎいたもてふけるいたまのあはざらば如何せんとかわがねそめけん

(11二五八)

七六 葦引の山鳥の尾のしだりをのながし夜をひとりかもねむ

(11二六三或本歌)

七三 小あしひきの山よりいづる月まつと人にはいひて君をこそまで

抄二

(12三〇三)

七五 秋の夜の月かも君はくもがくれしばしも見ねばこころこひしき

(10三九九)

七五 長月の在明の月の有りつつも君しきまさば我こひめやも

(10三〇〇)

- 八〇七 ▽ゆふけとふうらにもよくありこよひだにこざらむ君をいつかまつべき 抄二七 (11二六三)
- 八〇八 うつつにはあふことかたし玉の緒のよるはたえせずゆめに見えなん (5八〇七?)
- 八〇九 わがせこをきませの山とひとはいへど君もきまさぬ山のなならし (7一〇九七)
- 八一〇 人ごとは夏野の草のしげくとも君と我としたづさはりなば (10一九三)
- 八一〇 秋の田のほのうへにおけるしらつゆのけぬべく我はおもほゆるかな (10三三四)
- 八一一 住吉の岸を田にほりまきしいねのかるほどまでもあはぬきみかな (10三三四)
- 八一二 ▽あさねがみ我はけづらじうつくしき人のた枕ふれてしものを 抄二六 (11二五七)
- 八一三 ▽みなとりの葦わけを舟さはりおほみわが思ふ人にあはぬころかな 抄二五 (11二七四)
- 八一四 八五五・三五(重出) いはしろのの中にたてる結松心もとけず昔おもへば (2一四)
- 八一五 みな人のかさにぬふてふ有ますげありてのちもあはんとぞ思ふ (12三〇六)
- 八一六 こひこひて後もあはむとなくさむる心しなくはいのちあらめや (12二九四)
- 八一七 なには人あし火たくやはすすたれどおのがつまこそとこめづらなれ (11二六五)
- 八一八 たらちねのおやのかふこのまゆごもりいぶせくもあるかいもにあはずして (12二九一)
- 八一九 ▽ちはやぶる神のいがきもこえぬべし今はわが身のをしけくもなし 抄二四 (11二六三)
- 八二〇 住吉の岸にむかへるあはち島あはれと君をいはぬ日ぞなき (12三九七)
- 八二一 かきくもり雨ふる河のささらなみまなくも人のこひらるるかな (12三〇三)
- 八二二 とにかくに物はおもはずひだたくみうつすみなはのただひとすぢに (11二六八)
- 八二三 郭公かよふかきねの卵の花のうきことあれや君がきまさぬ (10二九八)
- 八二四 わたしもりはや舟かくせひととせにふたたびきます君ならなくに (10二七七)

一一〇 庭草にむらさめふりてひぐらしのなくこゑきけば秋はきにけり (10三六)

一一三 秋風のさむくふくなるわがやどのあさぢがもとにひぐらしもなく (10三五)

一一四 あき風し日ごとにふけばわがやどのをかのはは色づきにけり (10三九)

一一五 秋ぎりのたなびくをの萩の花今やちるらんいまだあかなくに (10三二)

一二八 このごろのあか月つゆにわがやどの萩のしたばは色づきにけり (10三八)

一二九 あづさゆみひきみひかずみこずばこそをなぞよそにこそ見め (11三六〇)

一三三 みしま江の玉江のあしをしめしよりおのがとぞ思ふいまだからねど (7三四)

四十六首中、まず拾遺抄にも載せる八首について歌詞の相違を対比してみよう。(拾遺和歌集―拾遺抄―萬葉集)

一四 ひとぼしも―ひとぼしの―比故保思母 思ふらんやぞ―おもふらんやぞ―於毛布良米也母

六五 いかでくらさん―いかでくらさむ―如何將晚

七四 あらねども―あらねども―不有尔 おもほゆるかな―おもほゆるかな―所思可聞

七六 君をこそまで―君をこそまで―妹待吾乎 (君待吾乎)⁽⁸⁾

八七 ゆふけとふ―ゆふけとふ―夕トル毛 うらにもよくあり―うらにもよく有り―占尔毛告有 (後述)

こざらむ君を―こざらん人を―不来君乎 いつかまつべき (堀河本・天理甲本・北野本、いつかたのまむ)

―いつかたのまむ―何時將待

八八 人のた枕―人のたまくら―君之手枕

八九 わが思ふ人に (堀河本・天理甲本、恋しき人に)―恋しき人に―吾念公尔 あはぬころかな―あはぬころ

かな―不相傾者鴨

九四 神のいがきも (堀河本・天理甲本、神のやしるも)―神のやしるも―神之伊垣毛 今はわが身の―いまは

我がみの—今者吾名之—をしけくもなし—をしげなければ—惜無

萬葉集歌の訓読に關しては、拾遺和歌集のほうに拾遺抄よりも少数ながら正しい箇所がある。しかし、必ずしも萬葉集の原歌を忠実に訓もうとしたのではなく、多くは拾遺抄の歌詞と比べて生かすべきはこれを踏襲したのであるらしい。

次に、その他の三十八首の詞書および歌詞を人麿集・萬葉集と比較してみよう。(題しらず・詞書ナシの場合は省略)

拾遺和歌集	人麿集 I	萬葉集
八八 たごのうらの藤の花を見侍りて	たこのうらの藤の花をみてお もひをのふ	……船 _ニ 泊 _ニ 於 _ニ 多祢灣 _一 望 _ニ 見 _ニ 藤 花 _一 各述 _レ 懷 _レ 作 _レ 歌 _四 首
一四四 とほき渡に あらねども	とをきわたりは なけれども	遠渡者 無友
三五三 もろこしにて かりのつかひに いっしかも ことづてやらん	「人麿集Ⅱ」もろこしにま かりて雁をきゝて かりのつかひも えてしかな ことづてやらむ	引津亭船泊之作歌七首 可里乎都可比尔 衣豆之可母 許登都寻夜良武
四七四 衣はすらん	衣はそめん	衣者将措

四七六	<p>わが衣手の ひる時もなき</p>	<p>我衣手に。 ひる時なくに</p>	<p>吾袖者 干時無香</p>
四七八	<p>もろこしへつかはしける時よめる 衣手さむし</p>	<p>(詞書ナシ) 秋風さむし</p>	<p>海辺望月作歌九首 安伎可是左牟思</p>
五四六	<p>ゆふ日かくれぬ (堀河本・天理乙本・多 久本・北野本、ゆふ日かくれの)</p>	<p>夕日かくれの</p>	<p>夕日隠奴</p>
五六六	<p>旋頭歌 ますかがみ みしかと思ふ たえたるこひの しげきこのごろ</p>	<p>旋頭歌 ますかゝみ みしかとおもひ たえたるおもひ しけしこのころ</p>	<p>旋頭歌 真十鏡 見之賀登念 絶有恋之 繁比者</p>
六二八	<p>やへ雲がくれ おとにのみやは きき渡るべき (堀河本・天理甲本、き わたりなむ)</p>	<p>やへくもかくれ 音にのみやは きゝわたりなん</p>	<p>八重雲隠 音耳尔八方 (尔耳) (後述) 聞度南</p>

六六一	おく山の	〔人麿集Ⅰ〕おくやまの	青山之
六九六	けふは有りなん あけんあしたを（堀河本・天理甲本・北野本、あけなむあすを）	〔御所本人麿集〕 けふはありなん あけなんあすを	今日者在目杼 将開明日
七四六	すぎいたもて ふけるいたまの 如何せんとか わがねそめけん	すきたもて ふけるいたまの いかにせよとか あひみ初けん	十寸板持 盖流板目乃 如何為跡可 吾宿始兼
七七八	しだりをの	したりおの	四垂尾乃
七八五	月かも君は くもがくれ ここらこひしき	月 <small>（二字分空百）</small> 君は 雲かくれ 恋しかるらん	月疑意君者 雲隠 幾許恋敷
七九五	在明の月の 君しきまさば	有明の月の 君しきまさば	在明能月夜 君之来座者

八〇九	<p>あふことかたし 玉の緒の よるはたえせず（堀河本・天理甲本・北野本、よるはたえすも） ゆめに見えなん</p>	〔貫之集I〕 あふことかたし 玉のをの よるはたえすも 夢にみえなん	歌詞兩首 大宰帥大伴卿 安布余志勿奈子 奴婆多麻能 用流能伊昧仁越 都伎提美延許曾
八一八	<p>きませの山と 君もきまさぬ 山のなならし</p>	<p>きなれの山と 山の名ならし 君もきまさす</p>	<p>乞許世山登 君毛不采益 山之名尔有之</p>
八二七	<p>夏野の草の 君と我とし（堀河本・天理甲本、いもとわれとし） たづさはりなば</p>	<p>夏の草と 妹とわれとし たへさわりなは</p>	<p>夏野乃草之 妹与吾師 携宿者</p>
八三五	<p>けぬべく我は おもほゆるかな</p>	<p>けぬへくわれも おもほゆる哉</p>	<p>可消吾者 所念鴨</p>
八三六	<p>岸を田にほり</p>	<p>きしを田にほり</p>	<p>岸乎田尔墾</p>

	<p>かるほどまでも (堀河本・天理甲本、かるになるまで) あはぬきみかな</p>	<p>かるなるまでに あはぬ君哉</p>	<p>乃而及茹 不相公鴨</p>
<p>八五四・ 一二五六</p>	<p>昔おもへば</p>	<p>むかしおもは</p>	<p>長忌寸意吉麻呂見ニ結松ニ哀咽 歌二首 古所念</p>
<p>八五八</p>	<p>みな人の かさにぬふてふ ありてののちも</p>	<p>みな人の かさにぬふてふ ありての後も</p>	<p>人・皆・之・(皆・人・之)⁽⁹⁾ 笠尔縫云 在而後尔毛</p>
<p>八七三</p>	<p>後もあはむと なぐさむる いのちあらめや (堀河本、いかてあらめや) (天理甲本、いかてあらめやも)</p>	<p>こひにあはんと なくさむる いきてあらめやも</p>	<p>後裳将相常 名草漏 五十寸手有目八面</p>
<p>八八七</p>	<p>あし火たくやは すすたれど とこめづらなれ</p>	<p>あしひたくやの すすたれと 床めつらなれ</p>	<p>葦火燎屋之 酢四手雖有 常目頬次吉</p>

八九五	おやのかふこの いもにあはずして	親のかふこの 君にあはずして	母我養蚕乃 異母二不相而
九二六	いはぬ日ぞなき	〔古今六帖〕いはぬ日ぞなき	不言日者无
九五六	かきくもり ささらなみ まなくも人の こひらるるかな	日のくもり さくら浪 まてくも君か おもほゆるかな	登能雲入 左射礼浪 間無毛君者 所念鴨
九九〇	とにかくに ひだたくみ ただひとすちに	とにかくに ひだたくみ たゝ一すちに	云々 斐太人乃 直一道二
一〇七一	郭公（堀河本・天理甲本・北野本、鶯の） かよふかきねの	うくひすの かよふ垣ねに	鶯之（霍公鳥） ⁽¹⁰⁾ 往来垣根乃
一〇八五	わたしもり はや舟かくせ ふたたびきます	わたしもり 船はやわたせ 二たひきます	渡守 舟早渡世 二遍往来

	君ならなくに	君ならなくに	君尔有勿久尔
一一一〇	ひぐらしの 秋はきにけり	ひぐらしの 秋はきにけり	蟋蟀之 秋付尔家里
一一一三	さむくふくなる あさちがもとに ひぐらしもなく	さむく吹なへ あさちか原に ひぐらしなくも	寒吹奈倍 浅茅之本尔 蟋蟀鳴毛
一一一四	あき風し 日ごとにふけば わがやどの をかのこのはは	秋風の 日ごとにふけは わか宿の 岡のこのはも	秋風之 日異吹者 水茎能 岡之木葉毛
一一一五	秋ぎりの 今やちるらん いまだあかなくに (堀河本・天理甲本・ 北野本、またあかなくに)	秋霧の 今やちるらん またあかなくに	朝霧之 今哉散濫 未馱尔
一一一八	あか月つゆに	あかつき露に	曉露丹

	色づきにけり	う。ろひにけり	色付尔家里
一一九六	ひきみひかずみ こばこそをなぞ よそにこそ見め	ひきみひかずみ こはこそをなと よそにこそみめ	引見弛見 来者来其乎奈何 不来者来者其乎
一二一二	玉江のあしを いまだからねど	玉えのあしを いまたからねは	玉江之薦乎 雖未茹

現存のどの人麿集にも見えない歌は八〇九、九二六の二首である。これらが何故に人麿作とされたのかは未詳であるが、八〇九は貫之作歌（「貫之集」一六二三）とほとんど一致し、九二六は古今六帖（第三帖「浪」、よみ人しらず）に載せる歌と全く同じである。前者はおそらく萬葉集歌の訓読からは遊離した伝誦歌であったのが、あるいは人麿に仮託されあるいは貫之集に入れられたと見るべきであろうか。⁽¹¹⁾

右の表の中、拾遺和歌集と人麿集との間で歌詞が同じなのは、

六六一、七七八、七九五、八五八、九九〇、一一一〇、一一九六

少異のあるものは、

八三六、八五四・一二五六、八八七、一一一四、一一一五

などであるが、萬葉歌の訓読からはかえって遠くなっているものが多い。また、拾遺和歌集が萬葉集歌をほぼ正しく訓んでいるものは、

四七四、五四六、五六六、七四六、七八五、八一八、八三五、八九五、一一一八、一二一二

である。反対に人麿集のほうがより忠実な訓になっているのは、

一四四、四七八、六二八、一〇八五

であり、概して拾遺和歌集は、人麿作歌としての洗練された規準を示そうとしているように見える。九五六、一〇七一、一一一三などは原歌からは隔たっているが、これが当代の秀歌としてふさわしく改変された結果なのであろう。

五

拾遺和歌集の萬葉歌は、古点本から後次点本に至る萬葉集訓読の実態とどのように関わったのであろうか。『校本萬葉集』によって、まず歌詞について古写本の訓を検するに、

①嘉暦伝承本の訓と一致する例 (他の諸本の訓をカタカナで示す)

こよひなあけそ「是夜莫明」(11339)

コノヨナアケソ

こひするに「恋為」(11350)

コヒヲシテ・コヒシテハ

あはぬひかすを「不相日数」(11353)

アハヌヒアマタ

いもをこそおもへ「妹念」(11355)

イモヲシソオモフ

なにによそへて「何名副」(11356)

ナニニナソヘテ・ナニナソヘテ・ナニノナソヘテ

しはしうこきて「小動」(11357)

シハシトヨミテ・トヨマスハカリ

きみとまるへく「君将留」(〃)

キミヲトメム

うらにもよくあり「占尔毛吉有」(11358)

ウラニモツケアル・ウラニモツケタル

こさらむきみを「不来君乎」(〃)

キマサヌキミヲ

おとにのみやは「音耳尔八方」(11359)

オトニノミヤモ

ときそともなく「時友無雲」(11三〇四)

トキトモナクモ

が多いことが目立つ。この中で、「うらにもよくあり」(拾遺和歌集八〇七)の歌詞は、嘉暦伝承本のみが持つ本文「占
尔毛吉有」に一致するものである(その他の諸本は「占尔毛告有」)。また「おとにのみやは」(拾遺和歌集六二八)は、嘉
暦伝承本と類聚古集だけに見える訓で、本文もこの二本だけが「音耳尔八方」である(その他の諸本は「音耳八方」)。
嘉暦伝承本の訓と拾遺和歌集の萬葉歌とがかなりの親近性を有することは確かめられよう。ところが、

②元暦校本・元暦校本緒の訓と一致する例

けふみつるかな「今日見鶴鴨」(7二〇九)

ケフミツルカモ

いねさらむかも「宿将借鴨」(7二四三)

ヤトカサムカモ・ヤトカラムカモ

たつさはりなは「携宿者」(10一九三)

タツサハリネハ

いもにあはすして「於君不相四手」(10一九五)

キミニアハスシテ

ひくらし「蟋蟀」(10三三九・三六〇)

キリキリス

はふりこか「祝部等之」(10三〇九)

ハフリラカ

しめをはこえて「標繩越而」(〃)

シメナハコエテ

③金沢本の訓と一致する例

よる……なれる「来依荒磯乎……奈世流君香聞」(2三三)

キヨル……ナセル

④紀州本の訓と一致する例

あききりの「朝霧之」(10三二〇)

アサキリノ

⑤類聚古集の訓と一致する例

わかことや「如吾等架」(7二二〇)

ワカコトカ

いにしとし「去年春」(8四三)

ねこしてうゑし「伊許自而殖之」(〃)

おのかありかを「己我當乎」(8四六)

ことよりも「従情」(8四四)

ひたたたくみ「斐太人乃」(11二四八)

おくやまの△朱▽「青山之」(11二七〇)

ささらなみ「左射礼浪」(12三〇三)

などのように、萬葉集の原歌の忠実な訓読とは言い難いものも見られる。いずれも訓読がむずかしいわけではなく、その他の諸本が正しく訓んでいる箇所である。たとえば、原歌に「鴨」「君」「朝」とあるのをそれぞれ「かな」「いも」「あき」などと訓むとは考えられないのである。これらは原歌からは遊離して、いわゆる「仮名萬葉」として別個に存在していた歌なのである。さらに、現存のどの萬葉集諸本の訓とも一致しない例に、(カタカナは諸本の訓)

むもれたりけり「鬱有来」(4七九)

イフセカリケリ

よをばわが見る「世人吾等者」(7三六九)

ヨヒトワレラハ・ヨノヒトワレハ・ヨノヒトコトハ

枝にもはにも「枝母等乎々尔」(10三三五)

エタモトヲヲニ

衣手さむし「安伎可是左牟思」(15三六六)

アキカセサムシ

流れてもたゆる時なく行きかへり見む「常滑乃絶事無久復還見牟」(1三) トコナメノタユルコトナクマタカヘ

リミム

しまがくれゆくそらもなし君に別れて「雲隠穴氣衝之相別去者」(8四四) クモカクレアナイキツカシアヒワカ

レナハ

昔の人のこひしきやなぞ「奈仁曾許能兒乃己許太可奈之伎」(14三三三) ナニソコノコノコタカナシキ

がある。改作の範囲に考えてよいものである。反対に、当代の萬葉集訓読と全く一致する例としては、

ももへなる「百重成」(4四六)

よそにみるへく「遠可見」(11三三七)

こころをよせて「心依」(11四六三)

がある。⁽¹²⁾

最後に、異本系の拾遺和歌集(堀河本、天理甲本、天理乙本、多久本、北野本)の詞書には、萬葉集原本を直接参照したのではないかと思われる例がある。

「寄衣」(堀河本・多久本)―拾遺集(四七五)、詞書ナシ||萬葉集(7二二九八)「寄衣」

「詠山」(堀河本・天理乙本・多久本・北野本)―拾遺集(四九〇)、「山をよめる」||萬葉集(7一〇九二)「詠山」

「寄物述思」(堀河本・天理甲本)―拾遺集(八四五)、詞書ナシ:萬葉集(11二四六五)「寄物陳思」

「所発念」(堀河本・天理甲本)―拾遺集(二三二〇)、詞書ナシ:萬葉集(7一二六九)「就所発思」

いずれも人麿歌である。あとの二例など多少の変形を受けているものの、萬葉集の原本により近い形態を示している。どの段階かはわからないが、異本系拾遺和歌集の資料にはこれらの萬葉集の題詞をそのままに引き写したものがあつたのではないか。速断はできないとしても、あながちに「仮名萬葉」だけが資料であつたとも言えない一徴証かと考えられるのである。⁽¹³⁾

〔注〕

(1) 後に述べるように、一四二首のうちに萬葉歌でない人麿歌が十七首あるので、正確には一二五首が萬葉歌である。

(2) 以下、引用本文は『新編国歌大観』に拠ったほか、次のテキストを参照した。ただし校異は必要と思われるものに限った。

拾遺和歌集—片桐洋一氏『拾遺和歌集の研究』。拾遺抄—三好英二『校本拾遺抄とその研究』、片桐洋一氏『拾遺抄』。人麿集・貫之集—『私家集大成 中古I』、『御所本三十六人集』。古今六帖—中西進氏『古今六帖の万葉歌』。また萬葉集の原文は鶴久・森山隆編『萬葉集』に拠り、小学館日本古典文学全集本を参照した。

(3) 『新編国歌大観』の番号は古今六帖の四二三七。本文は書陵部蔵桂宮本。括弧内に石塚龍麿『校証古今歌六帖』の本文を、注2中西氏著によって記した。旧国歌大観番号三五〇八〇。

(4) 二首を並記した。各句とも右側が卷十の作者不明歌、左側が卷八の赤人歌。

(5) 本稿の主題からは外れるが、これらが何故に人麿歌とされたかは一個の興味ある問題である。いわゆる「柿本集の如きもの」にすべてあったものなのかどうか。参考のために新日本古典文学大系『拾遺和歌集』（小町谷照彦氏）の「他出文献一覧」によって記せば、この中で現存の人麿集に見えず、他の文献に出るものは、次の五首。二三九（寛平御時后宮歌合、古今和歌集、興風集、古今六帖）。七四五（躬恒集）。七九六（拾遺抄、古今六帖）。八〇八（拾遺抄）。九五七（拾遺抄、伊勢集）。また拾遺和歌集にしか見えないものは、五九七の一首。これら以外の十一首は人麿集その他の歌集に見える。

(6) 拾遺集の「いやたかからしたま水のたぎつの宮こ」は萬葉集の「弥高良思珠水激瀧之宮子波」を誤読した旧訓。『校本萬葉集』によれば、元、類、古、冷、紀は「思良」であるが、元緒、文、西、温、矢、京は「良思」。なおすでに斎藤茂吉『柿本人麿』（勅撰集選出歌考證）に指摘するように、萬葉集諸本の訓の中に拾遺和歌集の歌詞と同じ箇所がある。「ウルヒニタリト」（冷左）、「フナナラヘ」（元）、「フナクラヘ」（元、古、紀、細、矢左、京左）。

(7) 萬葉集の類歌（4六〇三、笠女郎）の第四句。

(8) 萬葉集の類歌（13三二七六、長歌）の結句。

(9) 『校本萬葉集』によれば、本文は元、紀、温、矢、京、西貼紙別筆、「人皆之」。西、類、細、古、京緒、「皆人之」。訓は元、類、古、西、「みなひとの」。紀、細、温、矢、京、「ひとみなもの」。即ち拾遺和歌集歌は類聚古集の本文・訓と一致する。

(10) 萬葉集の類歌（8一五〇一、小治田広耳）の初句。

(11) ただし八〇九は、萬葉集歌（5八〇七）を原歌としてよいかどうか、疑問が残る歌である。これらはいわゆる類歌の関係で、八〇九はあるいは「非萬葉歌」と見なすべきかもしれない。その場合、先の十七首（注5）に一首加わることになる。三好氏はこの歌を取り上げていない。また阿蘇瑞枝氏「拾遺和歌集の人麻呂歌」（共立女子短大紀要、十七号、昭和四十八年十月）も原歌に萬葉歌を掲げていない。渋谷虎雄氏の『古文献所収 万葉和歌集成 平安・鎌倉期』は萬葉集歌（5八〇七）を

原歌と認めている。

(12) 拾遺和歌集歌と萬葉集訓読との関係を取り上げた研究に、奥村恒哉氏「拾遺集の萬葉歌」(萬葉、十四号、昭和三十年一月)、上田英夫氏『萬葉集訓読の史的研究』がある。問題が錯綜するため、本稿はこの検討に十分に踏み込むことができなかった。別稿を期すことにしたい。

(13) 堀河本は、「一三三二」「いも山の……」の次に、

かも山のいわねしまきてあるわれをしらぬかおもがまちつゝあらむ

を載せる(天理甲本は、「かりやまのいわねのたまきあるわれをしらぬかおもがまちつゝませは」)。原歌は一三三二と同じ「鴨山之磐根之卷有吾乎鴨不知等妹之待乍将有」(2二二三)であるが、これは「鴨山之」の訓を正しく伝えている。

(一九九〇年十月二十五日)